

社会福祉法人

風土記

《60》

東京都

東京都墨田区に本部を置く賛育会。設立から1世紀余を経て、関東大震災や東京大空襲など多くの困難を乗り越え、病院や特養などを東京都、長野県、静岡県で幅広く事業展開している。

（大正7）年3月に賛育会を設立した。第1次世界大戦後、戦争景気は崩壊へと向かい、物価の上昇、特に米価の急騰などで疲弊し困窮する者が続出。防貧救済策として大正6年に

はさらに増大、この年に賛育会は誕生した。賛育会発起人の主要メンバーの一人・医学博士の木下正中（1869～1952、初代理事長）が名付け親だ。「賛育は、中国の『中

的に豊かな生活をしている人々は適当な助力を受けやすいがその点に不満足な人々は助力を受けるにもその途がないものが少なくない。それを救済したいというのが本会の出発点だった」（『賛育会の百年』）という。

設立には後に民本主義・大正デモクラシーなどで知られる政治学者の吉野作造（1878～1933、第2代理事長）、藤田逸男（1886～1956、第3代理事長）、

7～1978、第4代理事長）らが関わっている。発足した翌年には東京市本所区大平町（現墨田区錦糸）の古工場を借りて「妊婦乳児相談所」を開設、防貧事業としての母性保護事業・乳児事業を始めた。翌年、19（大正8）年8月には、本所区柳島梅森町（現墨田区大平）に庶民を対象にした日本最初の産院「本所産院」を開設。さらに産院内に「乳児院」を開き、母親を失った1歳未満の

本所産院と乳児院は焼失した。それでも、賛育会本部は小学校を借りて救済班を組織、救済活動に協力するとともに臨時産院を設け罹災乳児の収容保育を行った。のちに「賛育会を復興の途につけた人」と言われる医師・河田茂は救護活動をしつつ、宮内庁と粘り強く交渉し1000円の救済金を下賜され、その年の暮れには本所産院（のちの賛育会病院）と乳児院の仮の建物を完成させた。

療も開始する。33（昭和8）年、藤田逸男が3代目理事長に就任、56年までの間、戦争に翻弄された時代から復興への激動の時代を23年間理事長として法人をけん引する。昭和12年には訪問看護の先駆けとなる「訪問看護婦事業」を開始、賛育会病院で生まれた乳児の家庭を訪問し保育指導を行う。同17年には石島病院開設。やがて戦争が激化。米軍の本土攻撃に備えて空襲による延焼防止と避難場所確保のため「建物強制疎開」命令が下され、昭和19年12月に大井病院の取り壊しが決まる。年が明けると米軍の空襲が本格化する。【荻原芳明】

起源は東大YMCA

（明治21）年に発会した帝国大学生基督教青年会（東大YMCA）にさかのぼる。1916（大正5）年に東大YMCAは本郷追分（現文京区向丘）に5階建ての会館を建設し、翌年には会館地下室に診療室「大学青年会医院」を開き会員の医師たちが無料診療活動を開始した。さらに同メンバーが中心となり、より幅広い活動をしようと18

は岡山県に済世顧問制度ができ、翌年には東京で救済委員制度、大阪に方面委員制度ができる。これらの制度は名称や組織は違ったが瞬く間に全国に創設されて戦後に民生委員制度に統一される。米騒動が発生し社会不安

庸』にある『天地の化育を賛す』（宇宙における物質の変化や生物の生育はすべて天地自然の力であり、人間はその力を賛助する）から取った。物質

賛育会病院初代院長となる河田茂（1890～1959）、後の日本社会党初代委員長で1947年には第46代内閣総理大臣となる片山哲（1888

貧困乳児の昼夜保育を実施。「産婆学校」も開設した。事業は順調に展開していたが、23（大正12）年9月、関東大震災が発生、

日本最初の産院を開設

社会事業への転換

3年後に賛育会は財団法人となり吉野作造が2代目理事長に就任。従来の無料診療から実費徴収に、慈善事業から社会事業へとかじを切り活動を拡大した。翌年には大井診療所（大井病院）を開設するとともに錦糸病院の経営を委託される。1930（昭和5）年に病床数132の賛育会病院を開設し河田茂が初代病院長（大井病院院長兼務）となった。翌年には看護婦養成所を設置、夜間診



開設当時の本所産院

賛育会(上)



木下正中・初代理事長



河田茂・賛育会病院初代院長



藤田逸男・第3代理事長

社会福祉法人

風土記

《60》
東京都

1945（昭和20）年、外来の妊婦・乳幼児らが明けると米軍の空襲が一段と激しくなった。2月の空襲では砂町託児所（現江東区砂町）が焼失。3月9日夜から10日未明にかけて東京下町は、B29爆撃機325機による無差別爆撃（東京大空襲）により死者10万人という壊滅的被害を受けた。賛育会病院、錦糸病院、石島病院、乳児院など全施設が全焼したが、職員1人が犠牲となったほかは全員無事でまさに奇跡的だった。入院患者らは、錦糸町駅近くの映画館に担架などで避難し、事なきを得た。乳児院は44年の学童集団疎開に先立って茨城県に疎開していた。大空襲後、東京の入院

立ち向かう。翌46（昭和21）年1月、理事会は賛育会病院の復興を決議し、6月には焼けた賛育会病院のビルを一部板囲いして診療を再開した。激動期に藤田逸男・第3代理事長を補佐したのが東大在学中からYMC A活動一筋の丹羽昇（1902〜72）。丹羽は主事を11年間務め42年に常務理事に就任、44年陸軍に召集され陸軍将校として八丈島守備の任に就き、翌年終戦後に復員、

人、何でも屋の事務職員1人の計4人でコンクリートの上に板やゴザを敷いて寝泊まりしながら診療を開始した。「玄関扉はなく窓はゆがんだ枠のみ。部屋は壁なく間仕切りもなく、往來と直通、建物の周りは雑草の藪。藪の中には泥棒が巣くっていた。野戦に慣れていた私だが、さすがに内心驚いたり呆れたりしたものだ」と軍医将校だった竹岡は回顧している。5年後に病

東京大空襲で全施設全焼、疎開へ

信濃町）に古間診療所、翌年には神郷村豊野（現長野市豊野町）に豊野診療所（豊野病院）を開設、疎開してきた人や地元民のための診療や救済活動を展開する。

一方、東京では空襲の2日後に骨組みだけが残



丹羽昇・常務理事
特養「清風園」初代施設長

た。

空襲後、本部は東大Y

法人に復帰する。

院の修復が完了する。

空襲後、本部は東大Y MCA会館の一室を間借りし機能を死守しつつ敗戦を迎え、やがて復興に

丹羽は、病院復興を決めた1月の理事会開催3日前、フィリピン・レイテ島から復員してきた直後の竹岡秀策（元石島病院長）（1901〜84）と焼け跡で、奇縁の再会をし、復興への意を強くする。丹羽が復興を強力に推進し、焼け跡の板囲いの中では竹岡医師を筆頭に助産看護婦2

乳児院復興のために静岡岡具小等郡朝比奈村（現御前崎市）に土地を求めた。当地と近隣には入院できる病院がなく地元民からの強い要望にこたえて乳児院ではなく入院施設のある病院「東海病院」（のちの東海診療所）を52（昭和27）年に開設、静岡との関わりが始まる。この年、財団法人から社

復興遂げ福祉事業を展開



清風園（町田）・当時の建物風景（昭和39年）



賛育会病院（2012年スカイツリー完成当時）

会福祉法人に組織変更した。

昭和30年代に入ると高齢者問題が浮上してくる。賛育会病院でも高齢者の入院増加に伴い、介護を要する高齢者の退院先に苦慮しており、丹羽は「医療機関の賛育会こそが開拓的使命を持って取り組むべき社会問題」として、老人福祉法が公布された翌年の64（昭和39）年7月、特別養護老人ホーム「清風園」（定員100人）を東京都町田市に開設する。現在、特養を9カ所（長野1、静岡2、東京6）経営し、そのほか老健・軽費老人ホーム・認知症対応型共同生活介護施設など多くの事業を展開、訪問看護ステーションの整備なども進め、医療においても更なる充実を目指してきた。

児童分野では、「さんい保育園清澄白河」「さんい保育園有明」「さんい保育園有明」を江東区で経営し、キリスト教保育を掲げて一人ひとりの子どもが愛され、その子らしく育つことができる保育を実践、賛育会の初心「乳幼児と親へ寄り添う」を貫いている。

特養でもさまざまな事業を実施、子どもたちの居場所づくりとして静岡の東海清風園では駄菓子屋「えびす屋」を運営、紙芝居の上演なども行い親子の憩いの場所にもなり好評だ。町田市の清風園では、「こども食堂」「ここに清風食堂」、「長野の豊野清風園では「どよのスマイル幸腹食堂」を「誰でも食堂」として開催。2年前に創立100周年を迎えた。

【荻原芳明】

社会福祉法人

風土記

《60》

東京都

「奮育会の長野県における事業展開は、東京大空襲による疎開を縁として始まり、現在は長野市豊野町で豊野事業所として活動を続けている。

2019(令和元)年10月13日未明、台風19号により千曲川堤防が決壊し豊野事業所は2・3階の高さまで泥水につかった。特養・老健・介護医療院など5つの入所施設とクリニックや通所・訪問事業など全事業が機能停止になった。利用者278人は3日間かけてDMAT(災害派遣医療チーム)や自衛隊の支援を受けて近隣福祉施設や医療機関へ避難した。

複数の団体が協働で立ち上げた被災地域住民の

見通しは立たない。

奮育会では従来から感染症対策に力を入れ、奮育会病院の感染症制御専門医師(ICD)と同専門看護師(ICN)を指導者として法人感染症対策委員会を常設している。ICDとICNは年1回全施設を巡回し感染防止対策実施状況をチェック。感染症が発生した場合には随時、施設を訪問し助言指導を行い、施設内感染を最小限に抑える体制をとっている。また、

全施設に常設の感染対策委員会を設置、感染予防マニュアルに沿った業務体制を整え、職員教育を徹底し日々、感染の予防に努めている。

新型コロナウイルス対策としては即座に危機管理委員会を設置し、従前の感染症対策をさらに強化した法人内統一対応基準を設けた。3月以降のすべての行事や会議を中止・延期し、TV会議で対応。施設での面会を禁止し、家族へは手紙や写真で近況を

令和の災禍に立ち向かう

護老人保健施設「ゆたか」の事務長は語る。

今年に入ると、中国武漢から始まった新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい世界保健機関(WHO)はパンデミックを宣言した。日本でも4月7日には緊急事態宣

言が発せられて外出自粛要請や営業自粛、在宅勤務などが強く求められる事態となり、密閉・密集・密接の3密を避け「新しい生活様式」が推奨されている。いまなお収束の

報告、タブレットによる面会などを行っている。

「東京都地域周産期母子医療センターとしてNICU(新生児集中治療室)を有していますから、妊婦と小児を守ること。重篤化が少なく感染が分

本部総務部長は言う。

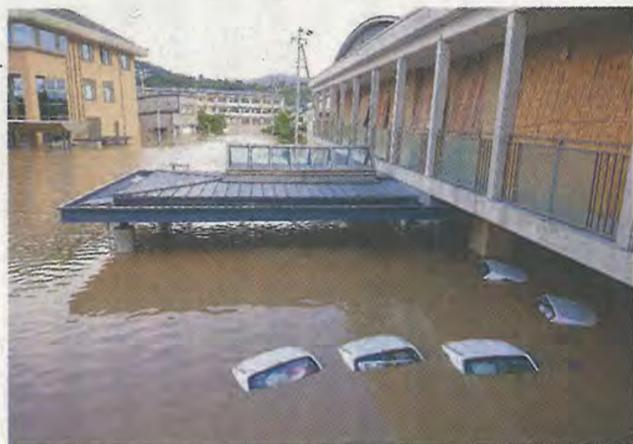
次の100年に向けて歩み出した奮育会だが、令和の時代に入り、またも大きな試練の時を迎えている。振り返ると、米騒動が発生し社会不安が増大した1918(大正7)年に設立された奮育

会は、1世紀を越す歴史の中で関東大震災や東京大空襲など度重なる災禍に見舞われたが、その都度克服し乗り越えて来

た。そのDNAが法人には流れている。

16施設、63事業、職員数2100人強の大法人となった奮育会。歴史の始まりは無料診療とキリスト教の「隣人愛」の実践。その本質・志は今も不変で、「人びとの『生きる』と『幸せ』を支援し地域に貢献していく」と高らかに謳う。

「私たちを取り巻く世界・社会は、これからも劇的に変化していくと思います。その変化に対して、何を変え、何を守らなければならないのかが問われます。奮育会は変化に柔軟に対応できる組織でありたい。一方、社会の変化にもかかわらず、保ち続けたい『想い』があります。創立以来持ち続ける『隣人愛』の実践と、すべての生命を尊重し大切にするという奮育会クレド(信条・志・約束)です。医療、介護、保育を通して『社会の中で弱い立場にある人びとに寄り添う』ことこそが奮育会の使命であると考えています」と小堀洋志・理事長は語る。【萩原芳明】



台風19号で水没した特養玄関(豊野事業所、2019年10月13日)



「ぬくぬく亭」で奮闘する職員

奮育会(下)

信条・志・約束 奮育会クレドは不変

「東京をとり巻く世界・社会は、これからも劇的に変化していくと思います。その変化に対して、何を変え、何を守らなければならないのかが問われます。奮育会は変化に柔軟に対応できる組織でありたい。一方、社会の変化にもかかわらず、保ち続けたい『想い』があります。創立以来持ち続ける『隣人愛』の実践と、すべての生命を尊重し大切にするという奮育会クレド(信条・志・約束)です。医療、介護、保育を通して『社会の中で弱い立場にある人びとに寄り添う』ことこそが奮育会の使命であると考えています」と小堀洋志・理事長は語る。【萩原芳明】



小堀洋志・現理事長(第11代)